倉橋惣三のアメリカにおける進歩主義幼児教育論受容に関する一考察
―プロジェクト・メソッドの捉え方に焦点を当てて―

A Study on the Acceptance of Progressive Kindergarten Curriculum in the U.S. by Sozo Kurahashi：
Focusing on the Acceptance of Project Method

韓　　在　熙
Jaehee HAN

要旨

倉橋惣三の保育論は、今日、日本の幼児教育・保育研究において多方面の視点から再評価されている。倉橋が近代欧米の幼児教育・保育論のなかでも、とりわけプロジェクト・メソッドの受容とそれにもとづく独自の誘導保育論の考案者として、日本の幼児教育カリキュラム史上いわば古典的な位置をしめてきたことは周知のとおりである。

拙稿では、倉橋によるプロジェクト・メソッドを含む進歩主義教育論の評価及びその展開に関する論稿を手がかりとし、その捉え方について三つの時期に分けて考察し、さらに彼の誘導保育案の構想と保育論の展開の特徴を明らかにすることを試みた。その結果、以下三つのことが明らかになった。第一に、倉橋の捉えたプロジェクト・メソッドを特徴づける原理は“目的活動”の概念であったこと、第二に、それが誘導保育論においては“目的のある活動”とされ、その活動過程は子どもの生活の中の興味や自発的動機から取り出された目的に向かっての“誘導”とさらなる知識の拡張にいたる“教導”の過程であったこと、第三に、最終的な教師の意図は、子どもの自発性による主題中心の系統的活動、即ち子どもの主体的な協同活動へと経験の連続的発展を図るところにあることである。また、倉橋独自のものとしての幼児の自由感のある生活論がその根底にあることを指摘し、誘導保育論において子どもの生活の自発性と保育者の目的性の調和が図られたことを指摘した。

キーワード：進歩主義教育論、プロジェクト・メソッド、自発性、目的活動、誘導保育論

1．はじめに

周知のように、日本における幼稚園の創設及び大正期の幼稚園改革は、近代欧米の幼児教育・保育論の多大な影響のもとになされたところである。なかでも特に、大正期のデモクラシーの発展と相俟って受容された進歩主義幼児教育論は、今日もなお、大きな意味を持っている（坂田喜朗、1973）。こうした大正期新教育運動の背景のなかで展開された倉橋惣三（1882-1955）の幼児教育・保育論は、今日の保育カリキュラム論（上野恭裕、1989）及び「幼稚園教育要領」（玉置哲淳、1994）の思想的系譜として脈々として受け継がれている。当然ながら、日本の幼

児教育史研究においては倉橋惣三の保育論は数多く論及されている。しかし、倉橋自身に欧米の教育を理論的に評価した論稿が数少なく、主に幼児教育実践の紹介と関連資料の翻訳が多いことも一因となり、倉橋の幼児教育・保育論形成におけるアメリカの進歩主義教育論の受容過程を詳しく分析した研究は数少ない。

律守　真は、倉橋の誘導保育論（1934）の展開におけるアメリカの進歩主義幼稚園論の受容に関する研究では、その誘導保育論の要旨、即ち主題の選択と展開において、幼児の興味と主体的活動が重視されている点について、1919年にIKU（International Kindergarten Union）によって作成された「幼稚園カリキュラム（The Kindergarten Curriculum）」が活用されている（律守真、1940）と指摘している。また金光香子は、大正・昭和期における児童中心の進歩主義保育として、倉橋の誘導保育論を取り上げている（金光香子、1983）。さらにまた、倉橋保育論におけるデューイ（Dewey, J. 1859-1952）の視座の評価と受容（玉置哲淳、1997：田中亭胤、1989）が、今日の「幼稚園教育要領」における「経験主義」や「活動主義」の思想的理論的背景となっていると評価されている。これらの点に関してはさらに、デューイに基づくプロジェクト・メソッドの受容過程の研究（湯川嘉津美、1999）や「近代日本におけるプロジェクト・メソッドの受容」[1)]（遠座知恵、2013）等の研究が注目される。このように、保育カリキュラム論・史における倉橋の評価は多数見受けられるが、一方で宍戸健夫のように、誘導保育案に関してはプロジェクト・メソッドから学んだもの（宍戸健夫：2010）という見解を前提としつつ、その幼児教育・保育論においては、教育目的が「性情の教育」とされ、そこに日本精神の流れが一貫させられ、これによって彼が外国の理論を借りてくるだけではなく、それをわが国固有のものとして消化することで、伝統的な日本精神思想の中で幼児教育を創造しようと試みた（宍戸健夫、1988）という評価もある。

以上のような先行研究を踏まえ、拙稿では、倉橋がアメリカの進歩主義幼児教育論、特にプロジェクト・メソッドの概念をどのように捉えていたのか、またその受容から生み出された誘導保育論の構造として、それがどのように活かされているのかについて明らかにすることを目的とする。

さきにも触れたように倉橋は、その生涯、即ち大正期の新教育研究、昭和期の幼児教育・保育論の展開、戦時下の国民幼稚園論の展開、終戦後の教育刷新委員会の委員としての保育要領（1948年）の作成に至るまでの幼児教育・保育の時代的展開のなかで幼児教育・保育にまつわる思想、原理、方法にわたって主導的な役割をはたしてきた。本論では倉橋が東京女子高等師範学校の講師となって新教育研究をはじめた1910（明治43）年から誘導保育案（1934年）の提示とその実践関連資料及びその後の関連文献に限定して考察を行うこととしたい。

２．倉橋惣三の幼児教育・保育研究とアメリカの進歩主義教育論の動向

倉橋が欧米の幼児教育・保育研究をはじめたのは東京帝国大学を卒業後、東京女子高等師範学校の講師（嘱託）として勤めるようになった1910（明治43）年頃からである。倉橋はフレーベルの『人間の教育』や『母の歌と愛撫の歌』や恩物に関する訳書などをもとにフレーベルの基礎研究[2)]をはじめるとともにスタンレー・ホールを含むアメリカの幼児教育論の研究を行っ

ている。倉橋のフレーベル研究は当然ながら、（1876明治９）年の東京女子高等師範学校付属幼稚園の創設時における保育内容や方法が海外の幼稚園関連書や幼稚園情報に頼っているという幼稚園史的背景をもっている。この研究においてフレーベルの幼児教育思想研究を基礎におきながらも、フレーベルの恩物中心の保育方法を形式的であると批判するようになる[3)]。倉橋はアメリカ留学前に「フレーベル主義新釈」（1913）と題する講演において、幼児の自己活動を尊重し、遊戯による保育方法を案出したフレーベルの根本精神に学ぶべきことを主張し、フレーベルの恩物中心の教育法だけに偏った捉え方について「私共フレーベルを尊重する者の今日の責務は、フレーベルを忘れて、所謂新教育法に」[4)]と指摘している。フレーベル教条主義の克服という課題意識を鮮明にしつつ、この課題に対する視点をアメリカの進歩主義教育の動静に求めはじめた倉橋にとって、文部省の在外研究員としての留学（1919.12 ～ 1922.2）はいうまでもなく大きな意味をもつものであったといえる。

当時のアメリカでは1890年代のスタンレー･ホールらによる児童研究が始まっており、ブロー（Blow. S., 1843-1916）を代表とするフレーベル主義の保守派と、ヒル（Hill, P.S., 1868-1946）を代表とする進歩派（リベラル派）とがIKU（International Kindergarten Union 1910）で論争を展開した。結局、進歩派の勝利によって幼稚園改革が行われ、所謂アメリカの新教育運動がはじまったのである。それと倉橋の研究関心との関連でみれば、留学以前のものとしてはスタンレー・ホール（Hall, G.S., 1844-1924）の研究が挙げられる。その評価の主なキーワードは「自由活動保育論」である。つぎに、留学後の論稿としては、デューイ及びキル・パトリック（Kilpatrick, W., 1871-1957）のプロジェクト・メソッドにおける目的活動理論及び主題中心の活動に注目している。その他の論稿としては、倉橋が滞米中に経験したコロンビア大学のホーレスマン幼稚園（Horace Mann School）及びシカゴ大学付属幼稚園（元Dewey School）の実践に関する紹介及び評価が多い。

ここでは、倉橋が注目したとみられる当時のアメリカの教育研究とこれに関連する教育界の動向を大きく三つの時期に分けておさえておく。第一期は前述したように、ホールらによる児童研究期として、ホールの自由遊戯保育論における「自由」の概念を捉えた留学前の時期と言える。第二期は、デューイやキル･パトリック（1908年コロンビア大学大学院で1908年からデューイに師事）らによる幼児教育の実践的展開、即ちシカゴ及びコロンビア大学付属幼稚園においてプロジェクト・メソッドの方法原理を実践にうつした時期である。第三期は、ヒルが完成したコンダクト・カリキュラムやその実践を広く渉猟した時期である。

（1）第一期：ホールらの新教育論研究

前述したが、倉橋のアメリカの教育論研究は、フレーベルの恩物中心の教育方法に対する批判がはじまった大正期の幼児教育の変革期を背景としている。つまり、当時のフレーベルの恩物中心の保育批判、すなわち恩物中心の保育方法が象徴的・形式的方法であると批判されると共に、この教条的なフレーベル解釈の克服という課題意識のなかでデューイのプラグマティズムに基づく新教育視座が台頭した時期である。

この時期に倉橋が捉えたホールやヒルの視座は子どもの自由活動を重んじる自由保育論で

あった。このなかで倉橋は、ホールの視座を基礎として実践されたサンタバーバラ市の公立幼稚園の自由保育プログラム（Burk, F., et al, 1917：A Study of the Kindergarten Problem, in The Kindergarten and First Grade. No.2.）を、アメリカ新教育の実践事例として紹介している。さらに倉橋は、アメリカ留学直前の1919年、「米国加州幼稚園における自由選択保育の実験報告」というテーマでアメリカの進歩主義幼児教育の雑誌であった『The Kindergarten and First Grade』に掲載された実践を紹介している。そして、ホールの保育論について、「幼児から、大人の干渉、無理おしつけの這入った訓練をせぬ様に、子供自身の経験を尊重するようにさせたい」[5]とする生活中心の自由保育論を評価している。

(2) 第二期：デューイ及びキル・パトリックらの教育論

倉橋のデューイ教育論に関する言及については、留学前の1917年の論稿「保育の教材と方法に関するデューイ教授の意見」があり、さらに留学中の1920年、日本国内の保育雑誌である『幼児の教育』第20巻第5-6号を通して、進歩派のテンプル（Temple, A.,）の「幼稚園と小学校との連絡問題」（The Kindergarten-Primary Unit: Part 1:Elemental School Journal, March）が艶子によって翻訳され連載されている論稿について言及する。

また倉橋は留学後の1922年には論稿「シカゴ及びコロンビア幼稚園」において、当該園での実践をデューイの視座に依拠した「デューイ主義」[6]の具体化と評価している。当時のシカゴ大学付属幼稚園は、デューイの実験学校であるDewey School（1896-1904）の考え方を受け継いだものであり、その保育理念と方法は1919年、IKUが打ち出した進歩主義教育の視座に基づく「幼稚園カリキュラム」を取り入れ実践していたのである。倉橋自身、このカリキュラムの翻訳を試み、1923（大正12）年から1924（大正13）年にかけて『幼児の教育』（元『婦人と子ども』）に、「万国幼稚園協会幼稚園要目」という題目で連載している。

また、当時のコロンビア大学では、1918年にデューイの教育論に基づく『プロジェクト・メソッド』を著したキル・パトリックが教育哲学を講じており、また、コロンビア大学付属幼稚園は、1905年のヒルらによるスパイヤ・スクール（Speyer School）の実験が受け継がれているホレース・マン・スクール（Horace Mann School）のカリキュラムが実践されていた。このようなシカゴ及びコロンビア両大学付属幼稚園の実践について、倉橋は両幼稚園がデューイの問題解決の原理に基づくプロジェクト・メソッド、即ち「目的ある活動」の①目的確定－②計画－③遂行－④判断という学習過程[7]に基づくカリキュラムが実践されていると評価している。

(3) 第三期：ヒルによる進歩主義幼稚園論

ヒルらによって1923年に完成されたコンダクト・カリキュラムについての評価に関して倉橋は、アメリカ留学後の1926年の「幼稚園令の読み方」、1934年の『幼稚園真諦』、1936年の「保育案」等の論稿において、主に「生活を中心とするカリキュラム」[8]として紹介している。コンダクト・カリキュラムはコロンビア大学のティーチャーズカレッジ（Teachers College）での付属幼稚園における実験を通して生み出されたものである。その実験が行われていた当時のティーチャーズカレッジでは、学生指導の必要性のうえから実験記録の充実が重視され、その

詳細な記録化が図られるとともに、記録の客観化に取り組んでいたと思われる。そうした環境の中、子どもの望ましい行為の習慣化とそれを育てるための適切な社会的刺激場面の目録づくりの実践研究が進められ、その結果としてコンダクト・カリキュラムが完成されたのである。

進歩主義幼稚園カリキュラム論の結実と言えるこのコンダクト・カリキュラムは、望ましい生活習慣の形成を具体的な目的としている。これはソーンダイク（Edward L. Thorndike：1874-1949）の心理学をカリキュラム案の心理学的根拠としており、「プロジェクト・メソッド」をその方法原理とするものであった。即ち、「コンダクト・カリキュラムにおける学習とは社会的要求に基づく目的を仲間による承認を通して実現していくという『プロジェクト・メソッド』の発想を受け継ぎ、この目的ある活動の中で『民主的な市民性の技術』即ちあらかじめ列挙された特定の習慣を身に付けることである」[9)]。その土台にはデューイの問題視座が置かれていることは言うまでもない。

この時期、「シカゴ大学教育学部ではサミュエル・パーカーとテンプルらが、幼小統合教授法の実験を行っており、その実験の経過や成果が『The Elementary School Journal』の記事や、パーカーの『幼稚園小学校における一般的教授法』、パーカーとテンプルによる『幼稚園と小学校第一学年の統合教授』などの著書」[10)] が出版されている。つまり、当時の進歩派の新教育運動の２大拠点であったシカゴ大学教育学部とコロンビア大学ティーチャーズカレッジでは、ジョン・デューイやキル・パトリック、アリス・テンプルやヒルらによって幼児教育カリキュラムが研究されており、特にそれは幼児教育におけるプロジェクト活動の実験結果を、小学校以上において継続発展させる幼小連携カリキュラムの開発を意味するものであった。下記の〈表-１〉は、本研究対象時期におけるアメリカの教育の動向、倉橋の紹介論稿や研究著述ならびに関連動向をまとめたものである。

〈表－１〉倉橋惣三の保育研究とアメリカの教育動向

年度	倉橋惣三の著書及び活動	アメリカの教育関連の動向
1910	東京女子師範学校で講師となる	‘10 IKU進歩派の勝利により論争終結
1911	『婦人と子ども』雑誌編集、「ピー・エス、ヒル氏『幼稚園唱歌』」 幼稚園の改良（スタンレーホール氏）	Dewey, J.『思考の方法』著
1912	幼稚園の教育『スタンレーホール氏』 「フレーベル主義新訳」	‘13 IKU P. S. Hill「 The Second Report」 Dewey, J.『教育における興味と努力』著
1915	「幼児教育の特色」	‘15 Dewey, J.『明日の学校』著
1916		‘16 Dewey, J.『民主主義と教育』著 Kilpatrik, W. H. コロンビア大学ホレースマンスクールでプロジェクト法実験
1917	東京女子師範高等学校主事就任、「保育の教材と方法に関するデューイ教授の発見」『婦人と子ども』	‘17 Kilpatrik, W. H.「プロジェクト・ティーチング」発表
1918		‘18 Kilpatrik, W. H. 「プロジェクト・メソッド」論文発表
1919	「幼稚園の自由」『婦人と子ども』 12月　アメリカ留学 「米国加州幼稚園における自由選択活動の実験報告」『婦人と子ども』	‘19 進歩主義教育協会(PEA)設立 IKU「The Kindergarten Curriculum」刊
1920	「生活か教育か」『京阪神連合保育雑誌』	‘20 Dewey, J. 来日、東京大学で講演
1921		コロンビア大学実験保育学校解説
1922	「シカゴ及びコロンビア幼稚園」『幼児の教育』	IKU「 The Kindergarten Primary Curriculum」
1923		‘23 P. S. Hill 「A Conduct Curriculum for The Kindergarten and First Grade」
1924	「自発活動と目的活動一～三」著	‘24 IKU雑誌「児童教育」刊
1926	「幼稚園雑草」・「就学前教育」著	‘27 Dewy, J. PEA名誉会長就任
1927	東京師範付属幼稚園主事就任	
1928		‘28 Dewy, J. PEAで「進歩主義と教育科学」のテーマで講演
1929	東京師範付属幼稚園主事再就任	
1930		‘30 Dewey, J. コロンビア大学を退任
1931	「アメリカ大学幼稚園の革新」『教育科学』	‘31 Dewey, J.『哲学と文明』著
1934	「幼稚園保育法真諦」	‘34 Kilpatrik, W. H『教育哲学原典』著
1935	「系統的保育案の解説」	
1936	「系統的保育案の実際」１-9『幼児の教育』に連載、「保育案」著	
1938		‘38 Kilpatrik, W. H　コロンビア大学退任 Dewy, J.『経験と教育』著
1939	「フレーベル」著	‘39 Dewy, J. コロンビア大学名誉教授

出展：キル・パトリック他　阿部真美子・別府受他訳（1988）『アメリカの幼稚園運動』明治図書、倉橋惣三（1965）『倉橋惣三選集』第一・二・三・五巻より筆者作成

３．倉橋のプロジェクト・メソッドの捉え方

(1) 実践原理としての「目的活動」の捉え方

倉橋は、1924年に著した「目的活動と自発活動」において進歩主義幼稚園カリキュラム論を理論的に考察している。この論において、倉橋はデューイ及びキル・パトリックのプロジェクト・メソッドを「目的のある活動」と定義し、それをフレーベルの「自発活動」の概念と対比

させ、教育の思想史てきにはデューイにその端緒が求められるとしている。倉橋が「プロジェクト・メソッドが我々に教えます所のある目的を子供に与えて或は目的と云わなければ問題を与えて、その問題を子供をして解をしめる」と言うとき、そこには明らかにフレーベル教条主義の克服が、単なる自発活動の復権ということではなく、その新たな次元での実践的展開でなければならないという問題意識がみてとれる。少しまとめて引用しよう。

「ただ所謂内在的潜在的な自発活動によって、気紛れな感情的な生活でなく、行手は分らないと云う生活じゃなく、小さい生活でも下らない生活でも、子供がその行手を見詰めて、結果を見詰めて目的を見詰めて、それを目当てとして出発して居ると云う生活、是が目的活動でありましょう。－（中略）－この点に於て自発活動と目的活動は取敢えず区別がせられる、自発活動の場合を自由遊戯に於て大いに実現するとしますならば、目的活動の場合に於ては一々目的問題を子供に与える、所謂プロジェクトを与えると云うことが大きな仕事になって来る、楽しく遊べよ、自発を恣にせよ、自発的であれよ、後は自然が良く育てゝ呉れると云う考え方じゃなく、御前の生活と云うものはこう云うものはこう云う目的に向って進め、此問題を解く為に進め、其目的其問題を子供の活動の出発点させる－（後略）－」

この時点での倉橋のいう自発活動とは、ある課題や問題に対しての目的意識的な主体的活動という次元に高められた自発活動ということになるだろう。「目的活動」とはいわば子どもの自発性の主体的な質を保証するための原理なのであった。

併せて倉橋は、デューイの著書『民主主義と教育』における「孤立し、分散し、浪費されている本能的なエネルギーが、ある一定の結果ないし目的と関連して互いに協調し、相互適応関係を確立して一定の目的を志向する一連の活動の系列（Line）が形成される」[11] という部分に注意を促している。これは子どもに本能的に内在する能動性、つまり子どもの生活における興味からはじまる主題活動が一つの目的に向かっての系列的活動に相互性を持ちながら発展するという倉橋の誘導保育案の主題活動の捉え方を示すものである。

(2) プロジェクト・メソッドの捉え方

倉橋はプロジェクト・メソッドに関して、「プロジェクト・メソッドは、教育の根本的解釈に関係のある事であり、然して一種の具体主義的傾向の大なる現われとみられるべきものである－（中略）－教育の本質的意義におけるプロジェクト・メソッドの第一点は目的から知識技能を生み出させる所の、具体的生活過程を教育に取りいれたというところにある－（中略）－プロジェクト・メソッドはこれを方法としてみる時は目的に向かっての教科教材の統合であるが、教育の本質から見れば、この実感的経験そのものを以て児童を教育していく具体主義」[12] であると述べている。このように捉えられた「目的から知識技能を生み出させる所」を、倉橋の誘導保育案に重ねてみると、幼児の生活の自己充実－充実指導－誘導という活動の流れをとおして最終的には教導にいたる実践展開の過程ということになる。

また、コロンビア大学付属幼稚園の実践について「一つの目的を立ててその目的に向って問題を解決していく。あるいは抽象的な問題を解決するばかりではなく、具体的解決即ち製作という」[13] と評価しているように、その基本原理を子どもの具体的で実際的な生活経験を

通しての問題解決による学びと把握している。さらに保育方法については、さきに引用したように「ある目的を子供に与えて或は目的と云わなければ問題を与えて、其問題を子供をして解をしめる」[14] すなわち「プロブレムソービング」としての主体的な問題解決型の学びを念頭に置いた上で、「併しながら其目的と云うものが、若しも子供の自発的興味と逆らうものであり、又そう云う与えられ方をされたとしましたならば、是は我々が通り過ぎて居る－（中略）－児童の自発性と云うものに対して矛盾を生じて来ましょう」とつけ加えているように、目的（保育者）と対象（子ども）の両義的関係に注意を促すのである。

４．保育論としての展開

(1) 保育原理としての「目的活動」

倉橋は、幼稚園保育法の考え方について、保育の質それ自体が保育者自身の生活と生活主体についての捉え方、さらに言うなら生き方あるいは人生観によって規定されるであろうと言う。つまりそれぞれの保育者の保育的個性によって、それだけの「園」としての個性がありうると考える。しかし個性化のもととなる保育者各自の捉え方、つまり保育観の相違は恣意的なものであってはならない。その相違の判断基準として倉橋は、保育観における目的と対象の関係の捉え方をあげる。保育観は何によって形づくられるのか、一つは「目的を本拠として教育に臨んでいくか、対象の特質に基づいて教育に臨んでいくかという教育態度の差違によって、相違が起こって来る－（中略）－その目的をどういうふうにして、対象の特質に適応させて行くかの工夫があって始めて、そこに教育実際が生まれて来る」[15] ということである。いまいちど倉橋に即して言うなら、目的を子どもに内在化させるのか、それとも子どものありのままの自然本性の発現をとおして目的へと誘うのか、その両義的なベクトルの捉え方によって保育の在り方、質の相違が起こって来ると説くのである。

また、倉橋は「従来においては教育に熱心であるということは、多くは教育目的に熱心であるということであったようです。しかし今日の教育の考え方においてはそれに留まらないで、目的と共に対象を重んじてこその熱心であり、対象に忠実であるということが、教育の大切な要諦になって来ているのであります」[16] と近代教育思想に間説しながら言及している。

倉橋が留学前に著した1914年の「幼稚園教育の原則」には「後に来るべき結果の予想を以て幼児の興味を促すということが元来不自然なのである」[17] と述べている。また、子どもの活動は「結果の意識から離れた自由・結果によらず活動それ自身より生ずる快感」[18] によって支えられるというように、子どもの活動における結果や目的の概念より自由活動の概念が主となっていたことが分かる。しかし、留学後の論稿には「目的が子供の生活の流れの範囲内で起きた時は、自発と矛盾したものではない」[19] と述べ、目的活動に関する論稿には「目的活動と云うものは一つの自発活動の中に這入った時だけ教育上の意義が出て来る、自発的目的活動、自然の帰着として有目的教育」[20] となると述べている。要約するなら、目的活動の導入及び展開は子どもの自発性に基づく活動でなければならない、というかたちで目的性と自発性の統一という問題を捉えるにいたったと言える。

また、倉橋のいう“目的”の概念は“保育項目の期待効果”において保育項目のねらい及び

目的としても展開されている。1935年に著した「保育案」のなかで「到達する所の、成就する所の、教育目的、即ち期待効果ということが保育項目の主点となる－（中略）－1919年のアメリカ委員たちはアテインメイントという言葉で言っているのであります、即ち到達する所のものを意味する」[21] と述べているように、1919年にIKUによって作られた幼稚園カリキュラムのattainment、即ち達成、到達あるいは修得したものという意味を引用し、保育項目における期待効果について論じており、それぞれの達成目標と評価のあり方を説いている。

(2) 誘導保育論の展開

1934（昭和９）年、倉橋は保育法を理論的に体系化した誘導保育案を完成する。その展開は「自己充実（設備・自由）－充実指導―誘導―教導」という四つの段階から構成されている。第一段階の「自己充実」について倉橋は、「幼児の生活それ自身が自己充実の大きな力をもっていることによって、すでにそこに教育の目的に結びつくつながりが見出せる－（中略）－幼児自身の自己充実を信頼してのこと」と、「この自己充実力を十分発揮し得る設備と、それに必要な自己の生活活動のできる場所」[22] が幼稚園であり、「その設備の心に、先生の教育目的が大いにはいっている」[23] と述べている。倉橋の描く幼稚園は、幼児の主体的な生活の展開を本旨とし、幼児の自然の要求としての自由感と教師の目的意識が込められた設備、即ち環境の中で幼児自身の生活活動が目的性と自発性の統一として十分に発揮できるように設えられた園であった。

第二段階の「充実指導」とは、幼児の生活の自己充実を図るために求められる、子どもの実態を見極めたうえでの援助を意味している。それは「子供が自分の力で、充実したくても、自分だけでそれが出来ないでいるところを、助け指導してやるという趣旨であります」[24] と述べているように、教師の一方的な目的の教え込みにならないという配慮の上での「指導」である。さらに言えば、幼児の生活における自由を前提に、設えられた環境の中で展開される自発活動としての自由遊びから、目的を持つ活動へと発展するなかで培われる「生活の精進感」[25] を見通した指導概念であるとも言えよう。ただしそれはあくまで倉橋が「外部の標準による指導でなく、相手の内部に即しての内部指導でありますから、子供の中に入ってでないと出来ません。－（中略）－充実を助けるために、先生は少し出て来ますけれども、自分も子供になって、－子供の内にはいって－、子供のしている自己充実を内から指導していくだけですから、その先生の所在は、子供にも見物人にもちっとも目立たないでしょう」[26] と言うように、子どもの内側にあるものを引き出して子どもの自発的活動を手助けすることに主眼がおかれている。

第三段階の「誘導」とは、幼児生活の特色が刹那的で断片的であることを指摘し、その断片性に系統をつけさせると興味が一段と広く大きくなることへの着眼から位置づけられる指導段階である。「つまり、自分の興味にある系統がついているときに始めて、生活興味（事物個々の興味でなく）が起って来るという大きな問題になるのであります。その意味からして、幼児の生活を、生活としてだんだん発展させていくことになります。すなわち、ここに誘導の問題が起って来るのであります。」[27] と述べ、子どもの興味・関心に端を発する自発活動は、その活動の発展に即する「生活興味」自体の「主題化」を可能にするのであり、保育者のそれを見

通した援助（「誘導」）により、当初の子どもの興味・関心はある目的課題性へと集約されてくるとされる。こうして「誘導」とは、自己充実の自然発生的段階から保育者の意図的指導への転化の局面に位置づく指導段階を象徴する用語として登場するのである。

第四段階の「教導」とは、幼児の生活の自己充実－充実指導－誘導の後に初めて持ち出されるものとしており、知識を加えて活動を発展させるものであるが、幼稚園教育としてはその前の段階までが重要である[28]と強調している。保育者の役割の観点から言えば、子どもの生活の中での自発活動の（生活を）主体的な発展を導くことによって（生活で）、培われてきた経験により高次な意味づけを与える（生活へ）、という保育援助指導の見通しのなかに位置づけられる「教導」なのである。ここでも“教”に“導”が続くこと、教／導という語義に注意が払われるべきだろう。

(3) 誘導保育案における主題中心活動

倉橋は、系統的保育案の「年長組の第一保育期」の事例案を提示しながら、その解説において「主題は目的の系列になって、目的の中のまた小さい目的、それが集まって大きい目的へという具合に連続発展する場合と、連続的発展はないが、その目的の中に包括統合せられて発展する場合とある」[29]と、二つの場合があることに触れ、それぞれの主題活動の期間は長期間若しくは短期間の活動が行われる場合が考えられると説明している。また、主題の選定や活動のはじまりは、子どもの自発的な興味に即して展開されていくこと、その目的も活動の連続的な相互性によって統合させられ、発展させられていく目的活動であるところに意味があり、それゆえその目的への誘導の重要性が強調されることとなる。

この主題中心の誘導保育法は系統的保育案の実践として、当時の東京女子高等師範学校付属幼稚園の教員らによって実践され報告されていた。

下記の〈表 - 2〉は、1936年から1937年にかけて『幼児の教育』に『系統的保育案の実際』という解説を連載した菊池フミノの東京女子高等師範学校付属幼稚園における誘導保育案の実践事例から、その主題のみを抜粋したものである。

〈表－２〉誘導保育案における主題

区分		第一保育期				第二保育期					第三保育期				
年少組	期間	第八週	第九～第十二週	第十三週	第十四週	第一～第二週	第二～第三週	第三週の一日	第四～第十二週	第十三～第十五週	第一～第二週	第三～第四週	第四週の二日間	第五～第六週	第七～第八週
	主題	汽車	水族館	七夕まつり	お話と唱歌の会	虫の家	秋祭り	お月見	おもちゃ屋	紙箱の家	お正月	旅行	節分	スキー場	ひなまつり
年長組	期間	第一週	第二～第三週	第五～第六週	第七～第八週	第一週～第八週	第三週の一日		第九～第十五週		第一週～第一〇週		第四週の二日間		第八週
	主題	おもちゃ作り	幼稚園を中心としてその付近の市街製作	五月節句	七夕まつり	人形の家	お月見		動物玩具のいろいろ		動物園		節分		雛祭り

菊池フジノは1932年に『幼児の教育』（第32巻）に「人形のお家を中心として」の題材として誘導保育の実践を報告[30]しており、浅井の見解（2009）を借りれば、「1936年から37年にかけて『幼児の教育』に「『系統的保育案の実際』解説」が連載された際に、菊池が誘導保育の項を担当した事実は、彼女の誘導保育の実践が一定の評価を得ていたことを示唆している」[31]と言えよう。左記の〈表-２〉で分かるように、その主題内容は、倉橋が「系統的保育案の解説」でも述べているように、子どもの生活関連の主題であり、季節、自然、年中行事等によって構成されている。また主題内容や年齢によって活動の展開期間の長短が設定されている。

東京女子高等師範学校における倉橋の「保育法」講義（1934年４月から翌年３月の学期終了まで）の記録から、その主題活動内容を挙げると以下のとおりである。

・「旅へ」－東京駅から―
　子どもの生活と駅を中心にしたテーマが密接に結びついて、売店・改札口・切符売り場・食堂・弁当売り等いきいきとした各種の活動が長期にわたって展開されている。
・「人形のお家を中心として」
　人形を二体備えて、実際に生活出来る家や設備を子どもと共に作っていき、さらに周辺の町のお店・乗り物・動物園・遊園地等へ活動が発展していく。

　出所：菊池フジノ監修、土屋とく編（1990）『倉橋惣三「保育法」講義録』フレーベル館p170

5．おわりに

あらためて倉橋を振り返ると、倉橋自身、誘導保育案の特色とは「元来が生活の内あるものの保育項目が、再び生活の内に統合され、還元されてゆくところ」であり、さらに「何かしら一つの主題を持ってゆくところから、この名称を附した。その主題は換言すれば目的である－（中略）－幼児は、主題から興味を促され、動機性を動かされ、生活の具体性の裡に統合せられてゆく」[32] と述べていたのであった。見てきたように倉橋には、フレーベル教条主義の克服を課題視しうるにたる、ルソーやペスタロッチを初めとする近代教育思想に対する造詣とそれにもとづく確かなフレーベル解釈の素地があったものと考えることができる。

そのような幼児教育・保育研究実践史のなかでアメリカ留学期を挟んで接することとなったフレーベル再解釈[33] とアメリカ進歩主義教育運動、それらを主導したデューイ及びキル・パトリックの新たな理論展開とその実践的探究の動きは、倉橋に鮮烈なインパクトを与えたと想像するに難くない。彼は「目的活動」の概念にもとづく「目的のある活動」としてプロジェクト・メソッド法を捉え、それを誘導保育論へとまとめあげたのであった。そこでの「誘導」は「教導」という一見相対立する概念へと帰結されるが、この二つの概念は、「目的ある活動」の発展過程において統一されるわけである。ただしこの「誘導」の目的的過程は、あくまで子どもの自由感のある生活経験の主体的な流れがその根底に据えられなければならない。即ち、誘導保育の実践過程は、プロジェクト活動として主題に取組む主体的な協同活動を志向すると言えるだろう。

倉橋が、「子供の生活に即するとともに保育者の意図する目的に即して行われるものである」とし、「前者は自発活動であり、後者は目的活動である」[34] というように、対象と目的が倉橋幼児教育・保育論の要諦である。言い換えるなら、子どもの主体性と保育者の主体的意図のジレンマをどのように具体化するのか、ここに誘導保育案の真骨頂があるわけである。そしてそのジレンマをつなぐのが生活概念なのである。「教育として持っている目的を、対象にはその生活のままをさせておいて、そこへもちかけていきたい心」[35] と生活主体としての子どもの経験をそれとして尊重しながら、いかに保育者の意図を交叉させるのか、誘導保育の課題はここに焦点化されることになる。この実践課題の集約としての「生活を、生活で、生活へ」という表現が長く幼児教育・保育の現場で語り継がれてきた所以である。

ただ、倉橋の生活概念については拙稿では具体的に論じることは出来なかった。倉橋はヒルのコンダクト・カリキュラムにおける社会生活を生活習慣として捉えており、「社会的ということは、幼稚園において旧くから認識せられていたことである。しかし、その根拠としては、幼児期が本能的に社会的生活を求める時であることと、及び一般人生において社会性を養うことが必要であるということとの二つを考えられるに過ぎない」[36] と述べているように、幼児教育における生活について論じている。このような倉橋のヒルの生活概念の受容について「民主的な社会を前提としているアメリカの幼児教育理論に学びながらも、わが国の社会状況と照らし合わせながら、『自他共に気持ちよき』社会生活のありようを探求し続けた倉橋の思想の変遷があった」[37] と指摘されている。このような倉橋の社会生活概念を含む倉橋の構想した子どもの生活論については、本論に続く次の研究課題としたい。

注）引用文献

1）日本におけるプロジェクト・メソッドの受容が実践志向の教育学研究であることに着目した遠座知恵は、プロジェクト･メソッドがどのように紹介･研究されたかを考察するために、プロジェクト･メソッドの紹介・研究に携わった受容主体とその紹介後、教育・保育現場に導入、実践した主体を区別した上でそれらを総体として研究している。遠座は、戦前教育史に関する先行研究を取り上げ、大正時代のプロジェクト・メソッドの紹介・実践主体として、東京女子高等師範学校及び同付属小学校における研究と実践、東京帝国大学及び神奈川県女子師範学校付属小学校における研究と実践、奈良女子高等師範学校や同付属小学校・幼稚園における研究と実践をあげ、その導入の実態と特質の解明を図っている。遠座知恵『近代日本におけるプロジェクト・メソッドの受容』風間書房　2013年pp3-4

　また、上記３ルートを通じて導入、紹介されたプロジェクト･メソッドは、書籍や雑誌記事などによって広く普及した。プロジェクト・メソッドの紹介は1920年に始まり1921年、1922年にピークを迎え、その後は急速に減少していく。その特徴は、当初から多様な情報が短期間に凝縮して紹介されたことと、記事の内容がアメリカにおける論考の翻訳紹介から実践家による実践報告へと急激に変改したということにあると言える。（遠座知恵、橋本美保（2009）「日本におけるプロジェクト・メソッドの普及―1920年代の教育雑誌記事の分析を中心に－」『東京学芸大学紀要』総合教育科学系、第60集pp53-65

2）倉橋惣三（1954）「子供賛歌」『倉橋惣三選集』第１巻フレーベル館1965年p141
なお、倉橋の引用に関しては適宜現代語表記に改めた。

3）「従来、明治初期の幼稚園教育の導入においては、真にフレーベルの精進に学ばず、恩物の操作など、技術的な側面の受容にとどまっていたがゆえに、恩物中心の形式的保育に傾斜したと考えられている。（中略）関信三をはじめとして、創設期の幼稚園教育の基礎を築いた人々は、フレーベルに関する書を読み、それを幼稚園教育の指針としていたのであった。」湯川嘉津美（2012）『日本幼稚園成立史の研究』風間書房ｐ370

4）倉橋惣三（1912）「フレーベル主義新訳」『婦人と子ども』第12巻第６号、フレーベル会p224

5）倉橋惣三（1919）「生活か教育か」『婦人と子ども』第19巻第20号、フレーベル会1919年p72

6）倉橋はシカゴ及びコロンビアの両大学において「社会的な意志的な人間陶冶を主とする教育主義を幼稚園に用いた」と述べ、「その日課の中にその遊びの間に、社会生活の面影を写そうとしている」と評価している。倉橋惣三（1926）「幼稚園雑草」『倉橋惣三選集』第２巻、フレーベル館1965年p399

7）Kilpatrick, W.,（1918）The Project Method, Teachers College Record, Vol.19, pp319-335

8）倉橋惣三（1926）「幼稚園令の読み方」『幼児の教育』第26巻10・11号、フレーベル会 pp3-4

9）滝沢和彦（1986）「コンタクト・カリキュラムにおける習慣形成：社会適応としての道徳教育」『教育と教育思想』第７集、教育思想研究会p21

10）橋本美保（2012）『幼児教育史研究』第７号、日本幼児教育史学会p51

11）Dewey, J.,（1916）Democracy and Education（1966）帆足理一郎訳『民主主義と教育』春秋社pp24-25

12）倉橋惣三（1922）「教育の具体主義的傾向」『児童教育』第33巻７・８号（『倉橋惣三選集』第５巻再収（録）p92-93

13）前掲書　倉橋惣三（1926）「幼稚園雑草」p365

14）倉橋惣三（1917）「保育の教材と方法に関するデューイ教授の意見」『婦人と子ども』第17巻第２号p74

15）倉橋惣三（1934）「幼稚園真諦」『倉橋惣三選集』第１巻フレーベル館、1965年p16

16）同上書p16
17）倉橋惣三（1914）「保育入門」『婦人と子ども』第14巻第４号、フレーベル会 p231
18）同上書p371
19）倉橋惣三（1948）「保育案と生活計画」『倉橋惣三選集』第４巻p344
20）前掲書、倉橋惣三（1924）「自発活動と目的活動」p76
21）倉橋惣三（1936）「保育案」『倉橋惣三選集』第４巻p43
22）前掲書、倉橋惣三（1934）「幼稚園真諦」p31
23）同上書p32
24）同上書p37
25）同上書p95
26）同上書p40
27）同上書p44
28）同上書p47
29）倉橋惣三（1936）「系統的保育案の解説」『倉橋惣三選集』第４巻p300
30）菊池フジノは（1932）「人形のお家を中心にして」（『幼児の教育』第32巻第５号、フレーベル会pp54-64）の誘導保育の実践を報告している。
31）浅井幸子（2009）「東京女子師範高等学校付属幼稚園における誘導保育の成立過程－保育記録の語り口に着目して」『和光大学現代人間学部研究紀要』第２号p45
32）前掲書、倉橋惣三（1936）「系統的保育案の解説」p299
33）湯川氏は倉橋のフレーベル理解について「アメリカにおけるフレーベル再解釈と幼稚園改造の動きは、フレーベル・オーソドキシーに疑念を抱いていた倉橋には清新なものであり、彼のフレーベル理解、幼稚園教育理解に基本的な枠組みを与えたであろうことは疑い得ない」と述べている。（湯川嘉津美（1999）「倉橋惣三の人間教育学－誘導保育論の成立と展開」『日本の教育人間学』皇　紀夫・矢野智司編　玉川大学出版部p62
34）富崎望（1983）「倉橋惣三の誘導保育論の形成過程」『日本保育学会第36回大会発表論集』p17
35）前掲書、倉橋惣三（1934）「幼稚園真諦」p24
36）倉橋惣三（1931）「就学前教育」『倉橋惣三選集』第３巻、フレーベル館p431
37）平野麻衣子（2015）「保育カリキュラムにみられる生活習慣形成プロセス－倉橋惣三と及川平治の『コンダクト・カリキュラム』受容の違いに着目して－」『乳幼児教育学研究』第24号、日本乳幼児教育学会p74

参考文献

上野恭裕（1989）「倉橋惣三の保育論と今日のカリキュラム改革との関連について」『園田学園女子大学論文集』第23巻
遠座知恵（2013）『近代日本におけるプロジェクト・メソッドの受容』風間書房
金光香子（1983）「我が国におけるプログレッシビィズムの保育カリキュラム」『日本デューイ学会紀要』第24回
Kilpatrick, W. H.,他（阿部真美子・別府受他訳（1988）『アメリカの幼稚園運動』明治図書
Kilpatrick, W. H.,（1918）The Project Method *Teachers College Record* Vol. ８XIX No.4
坂田嘉朗（1973）「アメリカ幼稚園運動におけるプログレッシブ幼児教育論:P. S. ヒルを中心として」『聖和女子大学紀要』第３号
坂元彦太郎・律守真・森上史郎・及川ふみ編（1996）『倉橋惣三選集』第一～五巻、フレーベル館

宍戸健夫（1968）「近代日本の保育思想の形成」『教育学研究』第35巻第３号
宍戸健夫（1988）『日本の幼児保育―昭和保育思想史―上』青木書店
宍戸健夫他（2010）『保育実践のまなざし』かもがわ出版
田中知志・橋本美保（2012）『プロジェクト活動－知と生を結ぶ学び』東京大学出版部
田中亭胤（1987）「幼児教育イデオロギーのパラダイム：幼稚園における教育理念を事例として」『日本デューイ学会紀要』第28号
田中亭胤（1989）「倉橋惣三におけるデューイ思想の受容：幼児教育カリキュラムの視点を求めて」『日本デューイ学会紀要』第30回
玉置哲淳（1994）「新幼稚園教育要領とデューイのカリキュラム論の関係についての詩論：幼児教育課程の構造的理解のために」『大阪教育大学紀要』第43巻
玉置哲淳（1997）「幼児教育独自のカリキュラム論研究の課題と構想：戦後幼稚園教育要領のカリキュラム論との比較を手がかりに」『エデュケア』第18号
土屋とく（1990）『倉橋惣三「保育法」講義録－保育の原点を探る』フレーベル館
Temple, A.（1920）艶子訳「幼稚園と小学校との連絡問題（一～二」『幼児の教育』第20巻第５-６号、フレーベル館（Temple, A.,: The Kindergarten- Primary Unit : Part 1; Elemental School Journal, March）
Hill, P. S.,（1923）Kindergarten – First Grade Education　高森富士訳（1936）『幼稚園及び低学年の行為課程』ランバス女学院出版部
Hill, P. S.,（1924）Conduct in Curriculum and Method in Kindergarten in Childhood Education, Vol.Ⅱ No.3
湯川嘉津美（1999）「倉橋惣三の人間学的教育学」『日本の教育人間学』（皇紀夫・矢野智司編、玉川大学出版部
湯川嘉津美（2012）『日本幼稚園成立史の研究』風間書房
律守真（1965）「倉橋惣三と誘導保育論」『幼児の教育』第65巻第10号、フレーベル会
律守真・森上史郎編（2008）『倉橋惣三と現代保育』倉橋惣三文庫10、フレーベル館